

# 幼稚園・保育園における巡回相談のあり方に関する一考察 ～鹿児島市幼児教育相談・幼児保育相談の試みから～

吉 田 ゆ り・岩 元 正 知・林 愛 子

## 1. はじめに

「子育て支援」が国の施策として行われる中、発達心理学・発達臨床心理学研究及び実践の中で「育児支援」・「保育支援」もしくは「発達支援」ということばが顕著に使われるようになってきている。その背景には複合的で広範囲の、子育て・子育てにおける変化が存在することが推測される。

### ○育児不安や困難、虐待等の支援の背景と制度の変換

ひとつには育児不安や困難、幼児虐待の社会問題化を背景に保護者の子育てそのものへ支援を求められる点である。平成11年改訂の保育所保育指針<sup>\*3</sup>においては、第13章において保育所における子育て支援が必須のものとして位置づけられ、地域における子育て支援の中核施設としての役割を保育所が担うことになった。同様に平成11年の幼稚園教育要領<sup>\*4</sup>においても、「施設や機能を開放して幼児教育に関する相談に応じるなど、地域の幼児教育のセンターとしての役割を果たすよう努めること」とされた。さらに「児童虐待の防止等に関する法律の一部を改正する法律」（平成16年）第五条<sup>\*1</sup>により、幼稚園・保育所は児童虐待の早期発見のみならず、「幼稚園、小学校等の学校及び保育所等の児童福祉施設は、児童や保護者に接する機会が多いことを踏まえ、児童及び保護者に対して、児童虐待の防止のための教育又は啓発に努めなければならないことが明らかにされた」<sup>\*2</sup>ことから、幼稚園・保育園での保育（以下保育とする）における役割の変化が明瞭である。

### ○障害のある子どもへの保育制度の背景と制度の変換

幼稚園・保育園という就学前の子どもの保育現場において、統合保育もしくは障害児保育の重要性が叫ばれて久しい。近年では、障害のある子どもの入園を受け入れるといった入り口の判断ではなく、障害のある子どもを保育の中で

どのように支援することがよいか、あるいは「気になる」子どもをどう考えていくかといった、保育方法の検討について盛んに論義が交わされている。特別保育事業のひとつとして障害児保育を実践してきた保育園と、折しも平成16年度より開始された特別支援教育の対象となった幼稚園と、施策・制度に差はあるものの、就学前の障害のある子どもへの保育の中での支援が不可欠なものとして位置づけられ、その質が問われている。

こうした背景を受け、全国でさまざまな試みが行われている。鹿児島市でも独自の取り組みとして幼児教育相談事業・幼児保育相談事業が平成17年から開始され、筆者らは相談員の一員として派遣されている。本論では、平成17年度から始まったこの事業の中で筆者らが取り組んだ相談活動の現状と課題を分析し、保育支援・育児支援の今後のあり方を考察し、子育て・子育て環境へ発達臨床心理学ができることを考えていきたい。

## 2. 事業の概要～鹿児島市の新しい取り組み

### 1) 事業の概要

鹿児島市は、平成17年4月より、幼児教育相談事業及び幼児保育相談事業を開始した。これは特に特別支援教育制度の実施に伴う巡回指導ではなく、従来園単位で独自に導入してきた巡回相談（以下、巡回相談とする）の形態を市が補助するといったコンセプトである。幼児教育相談は幼稚園、幼児保育相談は保育園を対象としているが基本的な事業計画は同様である。鹿児島市内の私立幼稚園・保育園全園に対し、相談員の派遣を行う事業である。1園につき年間6回までの相談員派遣にともなう負担を市が補助する。1回の派遣は3時間と設定し、事業の内容としては以下の4つとなっている。

- ・ 保育場面における子どもの観察
- ・ 保護者の相談、助言
- ・ 保育者の相談、助言、研修
- ・ 育児に関する講演等（保護者向け、保育者向け）

この事業においては、保護者や保育者との個別相談だけではなく、保育場面

における子どもの観察や従来各園が独自に実施していた講演会・研修会までを対象とし、1つの事業としてではなく各活動が別事業として行われしかも個別に従事する専門職も多いという調査結果（藤崎ら，2006）<sup>1)</sup>もあり、非常に画期的であると言える。

## 2) 相談員

相談員には現在のところ資格等の基準はない。現状では以下の通りである。

- ① 幼稚園保育園が独自に依頼した専門家等（大学等の教員や民間に勤務する相談者）
- ② 臨床心理士（鹿児島県臨床心理士会より子育て支援担当理事を窓口として推薦）
- ③ 臨床発達心理士（九州沖縄地区の臨床発達心理士からの任意の紹介）

相談は、園ごとに相談員を直接園長等が依頼して行われる。基本的には1園に1名の相談員が担当しているが、園の現状等に合わせ複数の相談員で担当をしている園もある。

## 3) 相談において想定される主訴

特に相談内容について、事業開始時に筆者らが想定した主訴は、以下の通りであった。

- ① 子どもの気になる行動について（保育者・保護者から）
  - ・発達障害の早期発見、虐待等のリスクや発見など、
  - ・保育の場での具体的な指導方法について

② 保育者からの相談；親との関わり方

③ 保護者からの相談；育児困難、育児不安、DV

④ 親自身の人間関係（園側と、親どうし、家族、夫、親族等）

しかし、一方で「園（保育園・幼稚園）や学童保育は、発達障害児、虐待を受けた子ども、気になる子どもなど、発達していくことに「困難を抱えた子ども」の保育で生じる多彩な問題状況に直面している」（浜谷、2006）<sup>3)</sup>と言われるよ

うに、想定した主訴以外の、正に多彩な相談内容を考慮することを心がけた。

### 3. 活動の現状と問題点

筆者らは、相談員として平成17年度には17園、平成18年度には18園を担当した。他にも相談員が独自の相談活動を行っているが、以下筆者3名の活動を中心に現状をまとめその有効性と問題点を明らかとすることで、巡回指導の今後について検討する。

#### 1) 「気になる子ども」とは

この2年間で「気になる子ども」として観察を依頼された場合、保育者がどのように気になるかについて観察の初回に聞き取りを行った。その結果を表1に示す。なお、この場合の「気になる子ども」は、障害があると診断や評価を受けていない子どもの場合とした。

表1 「気になる」内容について

「気になる」内容	実数	%
集団行動ができないあるいは難しい	71	93.0
お友達とうまく遊べない・トラブルが多い	65	85.5
指示が通らない・何となく会話が成立しない	54	71.0
気持ちに波がある（不安定さが目立つ）	41	54.0
ことばの発達の遅れ	34	44.7
知的な発達の遅れ	32	42.0
こだわりがある・同じ行動を繰り返す	22	29.0
多動で落ち着きがない	22	29.0
危険がわからない	16	21.0
動作がおそいあるいはぎこちない	11	14.0
攻撃的な行動が目立つ	6	8.0
トイレトレーニングができていない	4	5.0
指しゃぶり	2	3.0
発音の不明瞭	2	3.0

(複数回答可 観察対象児 76名)

「集団行動ができない」、「お友達とうまく遊べない・トラブルが多い」が突出して高いのは保育現場＝集団生活の場という保育の考え方が基本にあることによると思われる。実際の保育において保育者がスムーズに保育を進めていくことに困難を生じた場合に、保育者はもっとも困っているということにもなる。この結果は、同じ目的での先行研究と結果が異なる点がある。権藤(2006)<sup>2)</sup>によれば、主訴は「ことばの発達の遅れ」(54.1)「こだわり」(42.9)「発音の不明瞭さ」(41.8)の順であるとされ、今回の結果と非常に似ているが異なっている。こうした巡回相談に何を期待するのか、園がどのような説明のものに相談事業を導入しているかなどの要因により異なることも考えられ、今後さらに調査分析を行っていききたい。

今回の結果からは、子どもとしては、気になる点は複数であり、また複合的で一つの原因に集約できない、単独の点のみが気になるという訴えではないことがわかった。例えば「指しゃぶり」が気になっていても、その他に「ことばが遅い」「お友達とうまくあそべない」などの点も聞けばあるということになる。

こうした保育者の「気になる」内容を集約すると、子どもは気になる点を複数・複合的にもっており、これに対してどのように気になっているかは以下の4点に集約できる。

- ・ 発達の遅れあるいはゆがみ(障害)の疑いがあると考えている場合
- ・ 発達の遅れあるいはゆがみ(障害)の疑いはないと考えているが、最近の様子が気になる場合
- ・ 保育の中で気になる場面や困ったことなどがあり、発達の遅れあるいはゆがみ(障害)のためなのかわからない場合
- ・ 保護者より気になるという訴えがあった場合

こうした場合、専門家の判断と支援方法を知りたいという現状が明らかとなった。

## 2) 「保育場面における子どもの観察」

### ① 何を観察するか（観察の対象と場面）

観察対象となる子どもは、特定の「気になる子ども」あるいは障害があるとすでにわかっている子どもである。この子ども達の様々な保育場面について、有用な観察データが得られた場面を列記すると、登園、降園、自由あそび、設定保育、トイレや着替え、食事などの場面、行事のなかでの様子などが挙げられるであろう。さらに、子ども達の様々な行動については、発達のいくつかの柱について偏ることない観察が求められる。その場合、運動発達（粗大運動・微細運動とそのバランス、ぎこちなさや不器用さなど）、言語発達（言語理解や表出・他者とのコミュニケーション行動など）、認知発達（記憶や概念理解、遊具や玩具、道具の操作、あそびの展開など）、社会性・情動の発達（感情表出や安定、保育者や他児との関わり、保護者との関わりなど）、行動面（こだわり行動や常同行動、多動や衝動性、注意集中など）が必須項目として挙げられるであろう。

保育場面での保育者の支援のあり方（指示の仕方、声のかけ方、教材の用意や選択の方法、他児との関わりの調整）、さらに保育構造そのものの観察として組織としての保育施設の構造、保育の展開や保育室の構造、保育の年間計画や月間週間計画、デイリープログラムの展開などに留意することも大切であると思われた。

### ② 観察の形態

保育場面の観察の形態には、参与観察と非参与観察の両方が採られた。いずれにしても、日常生活の流れを操作したり壊したりしないで園児たちの言動を観察することに留意することを原則とした。

### ③ 観察の有効性と問題点

#### ○ 観察項目

上記に観察項目を列記したが、保育場面に相談者が入ることにより、方法によっては観察項目のかなりの部分を網羅し臨場感のある観察が可能である。保育場面での観察は子どもの日常そのものをフィールドとする物であり、相談室

やプレイルームでの非日常の観察とは意を異にすることを再確認した上で、巡回相談においてはこうした観察が有効性をもつことが明確となった。

同時に、これらの項目の観察は園との相談日程・時間の組み方次第であり、なかなか網羅することが難しい面もある。今回事業では1園につき年6回・1回3時間という条件もあり、登園時のみの観察などが組みにくい実態もある。よって保育者との連携、情報収集が不可欠となる（後述）。

さらに、観察で得られるデータは相談者の力量や関心によって左右される可能性があることも忘れてはならない。相談者はこどもの発達について精通し、観察手法を十分に学んだ上で、自らの観察の枠組みをもって相談に臨むことが求められよう。

#### ○ 観察方法

現在の活動は、普段の保育に近い状況で園児たちの観察を行なっている。この観察の中で職員から気になる子の情報提供を受けることで遊び方や友達との関係の取り方など自然な観察が行える。また、相談員の視点で気になる子の発見もできると思われる。参与観察・非参与観察を問わず、園に相談員が訪問することは、観察者がその場にいること自体が園児や保育者の行動に影響を与えることは否めない。この点は相談員自身が留意する点であると思われる。

観察項目や方法については、近年こうした巡回相談のニーズの高まりとともに、研究や実践活動の報告が多く見られ、チェックリスト等の開発（本郷ら、2006）<sup>6)</sup>も進んでいる。相談員の力量の向上をはかった上で、こうしたチェックリスト等を活用することも有用であろう。

### 3) 保護者の相談、助言

#### ① 相談までの経路

保護者の相談助言に関しては、相談までの経路の違いが大きく、この事業の特徴が如実に明らかとなった。以下相談経路と主訴をあらわす。

表2 相談経路と主訴

	育児不安	発達上の心配	障害あり
園が相談希望者を募集、これに応募	8	1	0
園から相談をすすめられた	3	13	9
友人から相談のことを聞いて希望	2	2	0

\*1 育児不安とは育児上で気になることがある、不安がある、何となく相談してみたいなどを指す。

\*2 子どもの発達に気になることがあるために相談したい場合を指す

\*3 障害があると診断等を受け、保護者の気持ちの整理や今後の支援の方法の相談をしたい場合を指す

事業としては保護者と定義しているが、実際の相談者はすべて母親であった。

ここで考察すべきは、「一番困っているのは誰か」を考えることである。表2の通り、育児不安の保護者は、ほとんどが自分から相談を希望しているのに対し、発達上の心配の場合には、園（担任や主任、園長など）から勧められて相談に至っていることである。

すなわち、子どもの発達上の気になる点や行動について、「先生は困っているけれど親は困っていない」ことが背景にあることが示唆される。

また、育児不安に関しては、スクールカウンセラーや家庭教育カウンセラーと同様で、行政の補助制度に基づく相談事業はクライアントにとっては無料であり、相談を受けやすいようであった。育児中の母親にとって、相談にお金がかかることへの抵抗が高いことが伺われる。

## ② 保護者への相談助言での有効性

特に発達上に気になる点をもっている子どもに関しては、保育場面の観察を行った後、園より勧め、保護者との面接を行う場合が多く、これは観察児に関する情報の収集（生育歴や家庭での状況、親の養育方針など）を行うことができ、非常に有効であった。

また、観察で発達障害等が疑われる場合には、状況を見ながら療育資源や専門機関などの情報を第三者である相談員が伝え、必要であれば紹介し、来談の後にまたその結果や感想をきくことができ、園と保護者はいわば「味方」でありつづけ、さらに「たらいまわし」にされたと言う印象をもたないような配慮



も可能であった。

### ③ 育児不安の面接での有効性

柏木(2006)<sup>5)</sup>は、母親の育児不安の要因として、第一は、母親自身が有職者であるより、無職で専業である場合、育児不安が強いこと、第二は、育児参加の低い父親の場合、配偶者である母親のいらいらや不安からなる否定感情が高くなり、育児不安を強めることを論じており、育児不安が育児や子どもそのものへの不安や悩みではないことを示唆している。この通り、育児不安に関する相談はほとんどが幼稚園でのものであった。しかし、これは各園のこの事業の位置づけ、保護者への募集に関しての要因も大きく、一概には言えない。

#### ○相談内容の特徴

育児不安に関する相談内容は、子どもへのしつけのしかた・声かけやテレビビデオの見せ方・読み聞かせといった育児方法に関すること、あるいは指しゃぶりや夜尿など気になる行動といった具体的で明確な主訴があつての来談であるが、相談が進むうち、その主訴の背景にある育児への不安、育児をする自分への不安や迷い、夫(父親)を初めとする周囲への不満などへ展開されていくことがほとんどであった。

特に今年度何例かみられたものに「食育」に関する相談があり、興味深いものがあつた。食育基本法パンフレット(内閣府HP)によれば、「食育」とは、生きるうえでの基本であつて、知育、徳育及び体育の基礎となるべきもの、および、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践できる人間を育てることと位置づけている。

幼稚園での「幼児教育相談」における母親面接を通じて、特に専業主婦の場合、文部科学省が推進する「早寝・早起き・朝ごはん」運動や、農林水産省が推進する「食育」を育児場面に徹底することによって、子どもに基本的生活習慣を身につけさせ、健康に育てたいという理想的な母親像に縛られている感が伝わってきた。

このような場合、その夫婦関係は、主として専業主婦の母親が家事育児役割を、父親が稼ぎ手となる職業役割を担うという分業体制を築いているケースが

多い。但し、父親が意識的に育児参加していない訳ではない。昨今の不況からなる職場での少数態勢による労働条件の問題から勤務時間が早朝から深夜に及ぶことによって、次第に育児参加が困難となっており、夫婦間の分業体制を構築する中に自身が職業役割を担うことで、家族がより良い生活を営めることを目標としていると考えられる。

そして、こうした父親の状況を理解しながらも、母親からすれば子育てや「食育」を実践することがどれだけ重労働であり、精神的肉体的負担が大きいことを理解して欲しい、あるいは、子どもを健康的に育てていることを認めて欲しいという願望が強くなる。しかしながら、休日になっても父親が育児に参加しないことや、母親に対するねぎらい不足などが目に付くようになり、母親はさらなる精神的ストレスが重なることで、ある種の育児ストレスが生じてくるようになる。本来大切なことは「食育」を実践する母親像ではなく、「食育」を通じて、食卓を囲みながら子どもとのコミュニケーションを形成していくことが、子どもにとって食習慣を身につけるだけでなく、社会性を育んでいけることにつながる手段となりうるのであるが、母親が専業主婦である場合にはことさら、「食育」実践者であることによって、やりがいや自身の存在価値を見出しているように見受けられた。

#### 4) 保育者の相談、助言、研修

##### ① 子どもについての状況の確認の有効性とコンサルテーションの重要性

子どもの保育場面での観察に先立ちあるいは観察後、保育者から情報を得ることでより正確な子ども理解につながることは言うまでもない。ここで注意すべきは「保育者が、一番困っていることは何か」である。園との連携・コンサルテーションの端緒として、保育者の相談・助言・研修は、最も重要なものだとも言える。

相談事業の中で感じたこととしては、集団行動ができない・勝手な行動をする・友達をたたくなどクラスの中で目立つ子どもに対して保育者は困っていると感じているようである。しかし、そこには発達障害に関する知識のあいまい

さ、また知識はあっても実際に接する経験がないことなどにより、園児と戸惑いながら接している状況があった。このようなことから、園内で困っていることや相談員として知っていてほしいことなどを中心に研修を行うことも必要であろう。

また、職員は家族との関係にも悩みを抱えている。園児の様子や職員からは伝えにくいことも第3者である相談員が入ることによって家族と職員の関係を壊さずに介入することができるだろう。何よりも家族にとって職員は常に子どものことを相談する一番身近な存在であると考えられる。その職員との関係が悪化するということは、家族にとって子育ての不安を増すことになるかもしれない。そのため、そういった点でも相談員の果たす役割は広く求められているように思われた。

## ② 保育者を支援する

この事業ひいては巡回相談の目的は、こうした保育者の相談・助言・研修、総じて保育者へのコンサルテーションが主眼であるともいえる。

### ○相談者の見たてと支援の方法を伝える

子どもの観察を通して、相談者は、その子どもをどう理解したか（見立て）を保育者にわかりやすく伝えることが求められる。次に、これからの保育者が保育の中でどのような支援を行っていくかをともに考え、また保育現場の中で保育自体を観察することによりフィードバックすることも求められよう。

### ○子どもの発達に関する知識・技術の習得をねらった研修

講座形式の研修だけではなく、相談・助言そのものも研修とも言えるだろう。こういった広い概念の研修においては、いくつかの不可欠な観点があると思われた。

### ○保育者が「見立て」の枠組みを持てる支援

発達の障害か、発達環境のつまずきかを見極めることのできる、個々の障害などに関する知識をもつための研修は従来保育団体や学会などで行われているが、園単位での研修では、個別のケースを取り上げながら行うことができるメリットがある。こうしたことが、知識のあいまいさから間違った対応による二

次的障害の防止につながるであろう。また、保育者が自分のなりの見立てをまとめる力をつけること、記録をまとめる、報告をすることの研修も有用となるだろう。

## 5. 相談員の資質向上をめざして

最も重要「保育者は、自らの専門性を最大限に発揮しながら保育者集団で協力しながら状況が改善するように努力しているが、同時に外部の専門家からの支援を切実に期待している。とりわけ、子どもの発達と障害に関する専門性、すなわち発達臨床を専門とする心理職による巡回相談による支援への期待は大きい」(浜谷、2006)<sup>3)</sup>とされるように、最も大切なことは相談員の資質の向上であるかもしれない。

こどもの発達に関する知識及び観察技術、見立てのちから(発達アセスメントの技術を含む)、親の状態を見立てる力、心理面接の技術、保育組織構造の見立て、地域の医療・福祉・療育の情報の集約と提供、園内そして園と専門機関の連携を推進する力、こういった総合的なコンサルテーションの能力を求められる。非常に広範囲なこれらのことを、心理臨床もしくは発達臨床を専門とする相談員は求められていることを自覚することが不可欠であり、継続研修システムの必要性が検討されるであろう。今回の事業では、相談員の資格に一定の基準がもうけられていないが、巡回相談全般における課題として重要であるといえる。また、園内に支援的な雰囲気をつくっていきけるような相談員の人間性も要求されるであろう。

さらに筆者らの1名は男性の相談員であるが、男性相談員の意義も明らかにあるといえる。子どもの気になる行動や発育の問題などを相談に訪れたはずの母親が、結果として、子どもの問題よりも父親の子育て参加に対する問題へと置き換えられていくことは多々見られるが、ここに父親と同世代にある男性心理相談員の存在意義の重要性を唱えたい。

幼稚園での「幼児教育相談」の無職で専業である母親の場合、現在の主となる人間関係は園での母親であり、同性であることが多く、父親以外の異性との

付き合いや接触が有職者に比べ少ないと考えられる。

「幼児教育相談」の場合、心理士が女性であることが一般的であると考えられ、園の依頼も女性心理士であることが、半ば暗黙の了解となっているような印象を受けた。このような中で、事前に園から母親に対し男性心理士が担当するといった説明がなされ、それを理解し、面接を希望する場合、先にも述べたように子どもの問題よりも父親の問題が主訴となることがありうる。

池田(2003)<sup>4)</sup>は、カウンセリング場面におけるクライアントの言動全てを転移という視点で見直し、カウンセラーとの関係性の中でクライアントの心の中の現実が、どのような体験の焼き直しであるのか、吟味し理解していくことを「広義の転移」と論じているが、父親の問題を主訴とする母親の場合、男性心理士との関係性の中で父親(夫)に対する感情を転移されていると考えられる。

面接場面においては、父親から認められることの少ない母親に対し、「食育」の実践などねぎらった上で、専業である母親の存在価値を認めてあげることからラポールが形成され、育児ストレスや子どもの問題行動の背景にある家族の問題が浮き彫りにされ、真の主訴が見出されていくことが少なくない。母親は、育児参加の低い父親像や、子どもに対する憎らしさなど、「今、ここで」の感情が放たれることによって、カウンセリングを通して心の浄化作用を体感することが可能となると仮定できるからである。

## 6. まとめ

本論では、鹿児島市独自の巡回相談事業である幼児教育相談・幼児保育相談の試みから、幼稚園・保育園における巡回相談のあり方について考察した。幅広い保育支援が可能であるこの事業をモデルに、一層の巡回相談の重要性がはかられるよう今後も活動が続けていきたい。学校がスクールカウンセラーを導入し「学校臨床」領域の研究実践をすすめてきたように、幼稚園・保育園においても「保育臨床」領域の研究実践が進んでいくことを期待したい。

### 【注釈】

- ※ 1 「平成11年度改訂保育所保育指針」(フレーベル館)による。
- ※ 2 「幼稚園教育要領解説」(文部省)平成11年6月による
- ※ 3 「児童虐待の防止等に関する法律の一部を改正する法律」
- ※ 4 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知(雇児発第0813002号)(平成16年8月13日)  
「児童虐待の防止等に関する法律の一部を改正する法律」の施行についてより引用  
法律を受け、関係各機関及び地方行政に対して地方自治法に基づき技術的な助言  
の位置づけである。

### 【引用文献】

- 1) 藤崎真知代、大日向雅美、足立智昭、水谷孝子他15名(日本臨床発達心理士会実践研究プロジェクト育児支援)(2006)「臨床発達心理士の育児支援との関わりに関する実態調査」臨床発達心理実践誌, 第1巻 6-12
- 2) 権藤桂子(2006)「保育の動向と発達支援」コミュニケーション障害学, 23, Vol23, 136-141
- 3) 浜谷直人(2006)「子どもの発達と保育への参加を支援する巡回相談」(特集 発達と参加を支援する巡回相談)『発達』, 107号(その他同様に浜谷(2002)「保育を支援する発達臨床コンサルテーション」ミネルヴァ書房、浜谷(2005)「巡回相談はどのように障害児統合保育を支援するか:発達臨床コンサルテーションの支援モデル」発達心理学研究、第16巻、第3号を参考文献とした。)
- 4) 池田久剛(2003)「カウンセリングとは何か〔実践編〕」ナカニシヤ出版
- 5) 柏木恵子(2006):子育て不安—子育てと自分育ての葛藤— 柏木恵子・大野祥子・平山順子(著)(2006):家族心理学への招待 ミネルヴァ書房

### 【参考文献】

- 6) 本郷一夫(2006)「保育の場における「気になる」子どもの理解と対応」ブレーン出版